

特別史跡

# 一乘谷朝倉氏遺跡

1996

福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館



第97・98次調査主要部（西から）



第96次調査西半（東から）

特別史跡

# 一乘谷朝倉氏遺跡

1996

福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館

# 序 文

本年度の発掘調査は、昨年に引き続き、御所・安養寺と伝えられるところを調査しました。御所・安養寺は上城戸の南300m程のところにあり、室町幕府の15代将軍となる足利義昭が、朝倉氏を頼って一乗谷を訪れたとき、逗留していたところとして有名です。遺構は後世に大きく削平されてあまりよく残っていませんでしたが、規模は不明ながら朝倉館に匹敵する礎石が並んでいるところもあり、在りし日の立派な伽藍が想像されます。

また、上川原地係で家屋改築に伴う発掘調査をおこないました。調査地区は朝倉館からも近く、「一乗谷古絵図」では朝倉氏の重臣が屋敷を構えていたところとして、描かれています。東西に貫く土塀の基礎がみつきり、土塀で囲まれた屋敷だったことが判りました。罫の穂先が出土し、元染付や青磁の承台など、高級な陶磁器も出土しており、伝承を裏付けているようです。

環境整備では、下城戸の門にあたる部分の石垣を復元しました。巨石を積み上げた石垣はなかなかのものです。これで戦国時代の「下城戸」を通して、「城戸ノ内」にはいることができるようになりました。

最後になりましたが、事業の実施にあたっては文化庁を始め関係各位の皆さま、また地元の方々にはたいへんお世話になりました。心より厚くお礼申し上げます。

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長 貴志真人

## 例 言

1. 本書は福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が、平成8年度に実施した国庫補助事業による発掘調査の概要報告である。
2. 平成8年度は発掘調査中期10カ年計画の最終年度にあたる。本書には第97・98次調査（御所・安養寺）、ならびに現状変更に伴う家屋新築工事に伴う事前調査2件のうち1件（第96次調査-梅田春男宅）の結果を収録した。
3. 本書の作成にあたっては、調査員全員の検討・討議を経て岩田隆が編集した。また、執筆については文末にその名を記して文責とした。

## 目 次

### 巻首図版

### 序文

### 例言

### 目次

1. 平成8年度の事業概要	1
2. 第97・98次調査	2
遺構	2
遺物	9
安養寺と足利義昭の御所	16
3. 第96次調査	18
遺構	18
遺物	21
5. 石仏調査（西山光照寺跡）	26
6. 環境整備	36
図版 第97・98次調査遺構	P L. 1
遺物	P L. 5
第96次調査 遺構	P L. 9
遺物	P L. 12
環境整備	P L. 14

## 1. 平成8年度の事業概要

本年度は、「一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査・環境整備事業中期10カ年計画」の最終年度にあたる。発掘調査は第97・98次調査として福井市東新町安如寺地係にある「御所安養寺」の2,400㎡について実施した。発掘期間は平成8年4月1日から12月25日までであった。

「御所・安養寺」は、室町幕府第15代将軍となる義秋が一乗谷に朝倉義景を頼ってきたとき逗留していたと伝えられる所で、昨年に引き続き調査を実施した。後世に3段に削平され遺構の残存状況は良好とはいえなかったが、わずかに残る礎石の大きさが在りし日の安養寺を伝えていた。遺物では周辺の墓に立派な法名を刻むものがあり、この寺院の格の高さを示している。

「御所・安養寺」地区の耕土取りと平行して「瓜割流」（第95次調査）と「上川原」（第96次調査）の家屋新築に伴う事前調査を2カ所実施した。調査期間は第95次調査が4月10日から4月25日まで、第96次調査が4月23日から5月23日までであった。

第95次調査は、遺構らしい遺構はほとんどなかった。第96次調査は、第59次調査の北に隣接しており、土塀が巡る有力武将の屋敷であることが確認された。

環境整備は平成6年度に実施した下城戸の山裾に向かい合う部分の石垣を中心に整備した。石垣は巨石を使用していて、それが倒れた状態だったのを元の状態に起こしたり、失われていた石を一部補充したりした。これによって下城戸の整備は終了し、往時の偉容が復元できた。

調査回数	調査箇所	調査期間	面積	調査理由
95次	城戸ノ内町字瓜割流	4月10日～4月25日	400㎡	家屋改築に伴う事前調査
96次	城戸ノ内町字上川原	4月23日～5月23日	630㎡	家屋改築に伴う事前調査
97・98次	東新町字安如寺	4月1日～12月25日	2,400㎡	計画調査
99次	城戸ノ内町字新御殿	11月11日～12月25日	1,000㎡	一乗谷川河川改修に伴う事前調査
環境整備箇所		期間	整備事業内容	
城戸ノ内町下城戸		7月5日～11月25日	下城戸石垣積み替え	
保存処理		4月1日～9年3月31日	木製品400点 鉄製品250点 銅製品300点	

## 2. 第97・98次調査

本調査は、福井市東新町字安如寺地係の安養寺跡と伝えられる地区の2,400㎡を発掘した。この地区は上城戸の外300m程の位置にあり、東に山を背負う高台である。「御所・安養寺」跡と連称されることが多いが、これは永禄10年(1567)のちに室町幕府15代将軍となった足利義秋が、一乗谷に朝倉義景を頼ってきていたとき、この安養寺に逗留していたことによるものと思われる。地籍名では、本年度調査地の北側(昨年調査)が「御所」となっている。とすれば安養寺は両方の地籍あわせの広さになり、一乗谷ではもっとも大きい寺院の一つになる。

安養寺跡は御所跡とともに特別史跡に指定される直前に、圃場整備事業によってその一部が大きく削平されており、調査地区の東寄りには水路が通されている。指定地となったところでも一部ブルドーザーが入ったあとがあった。こうした事情もあって昭和45年に福井県教育委員会によってトレンチが入れられている。

発掘調査は、4月1日から表土の除去に入り、途中城戸ノ内の家屋新築に伴う現状変更による事前調査第95・96次調査を行って、6月から本格的な調査にはいった。8月半ばに第97次調査を終え、引き続き第98次調査に入った。11月中旬にほぼ調査を終え17・18日に写真測量を行った。以後部分的な補足調査と実測を行って終了した。

### 遺 構 (P.L. 10)

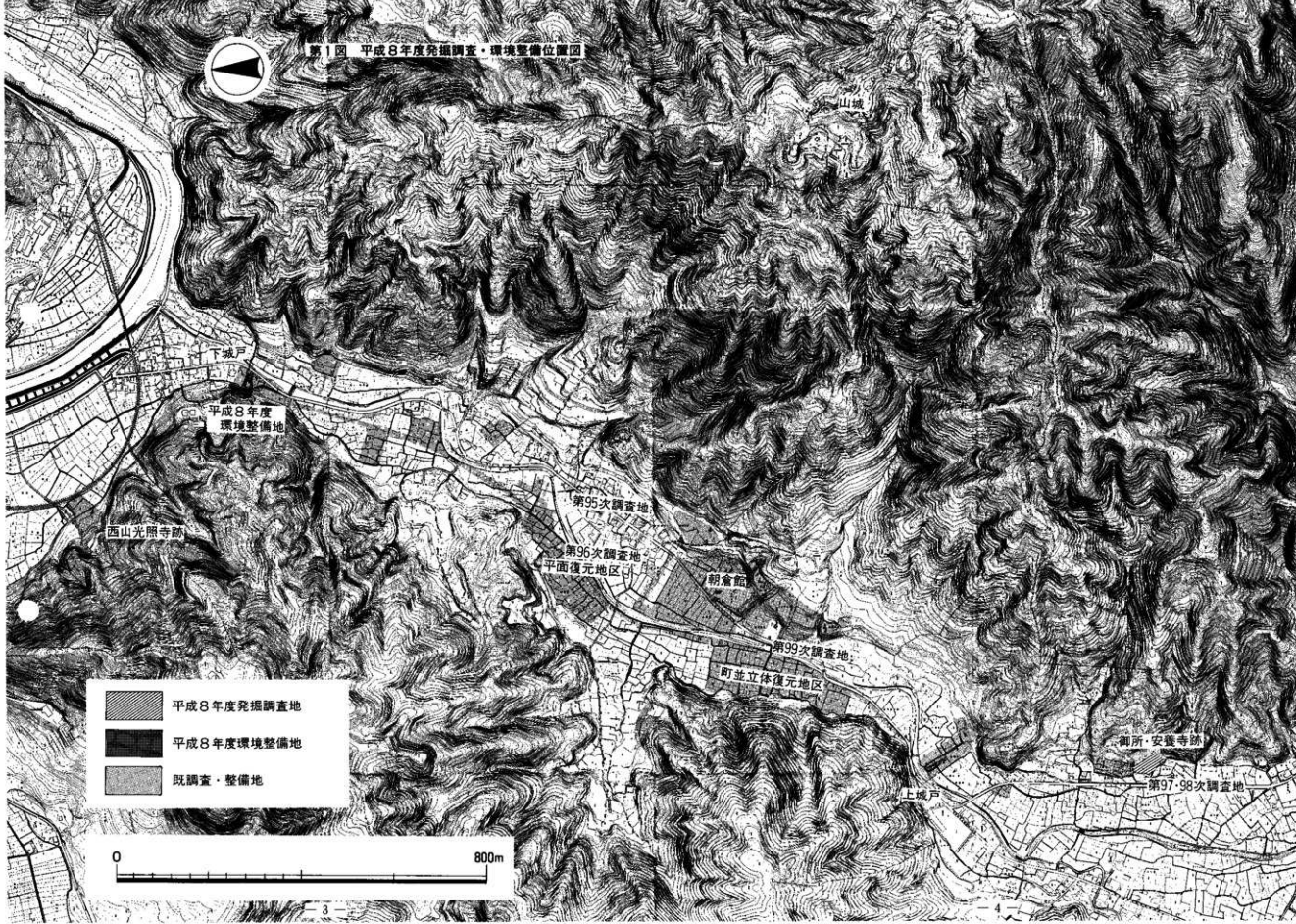
本年度の調査地区は、東に山を背負っていて、調査前は3段の水田跡であった。東側から1段目と2段目の間には圃場整備時に入れられた幅2m程の水路が走っている。3段に別れていて、遺構面としては連続せずそれぞれ時期が異なることから段ごとに記述する。  
上段

山裾に沿って発掘区東端の途中で石垣が見つかり、石垣と一体となった溝が見つかった。この溝に平行して礎石建物が存在していた。他に石積遺構がある。

S V 4618 発掘区東端の途中で見つかった山裾に沿った石垣で、長さは10m程、高さは北の高いところで1.2m程である。南側がやや低くなっている。使用されている石は20cm×30cm×20cmとあまり大きくないが、しっかりと積まれている。

S D 4570 上記の石垣と一体となった溝で、長さは同じく10m程、幅0.3m、深さ0.3mである。北から南に向かってわずかに傾斜しており、南端近くでは溝の側石が乱れていてはつきりしないところがある。石積遺構S F 4587の南を経て溝S D 4572につながるか、西に抜けていたと考えられる。

第1図 平成8年度発掘調査・環境整備位置図



- 平成8年度発掘調査地
- 平成8年度環境整備地
- 既調査・整備地





S D4572 発掘区の東南端にある石組溝で、長さは15m、幅は0.4m、深さは0.3m程である。溝石としては割合大きい石を使用しており、しっかりした溝である。溝の中程に笏谷石が3枚で蓋S X4617をしてあって、おそらくこの笏谷石は上の層敷地に上がっていくために架けたものであろう。

S B4586 溝S D4572と平行に3石の礎石が見つかった。溝とは1.2m程離れている。礎石の大きさは直径が0.5m程もあり、この建物がかなり大きかったことを示している。

S F4587 溝S D4570の南端に位置する石積施設で、長さ2.5m×幅1.2m×深さ1.0m程である。西側が内側に窪み形をしている。東側の石積みはかなり壊れていた。上半分の埋め土には自然の木の葉がみられた。

S X4615 溝S D4570の北端にある段で、北側が1石分高くなっている。ただ、この石段は直線的には並ばず折れ曲っている。

S D4574 発掘区の北端に位置する東西方向の石組の溝で、東の端で北に直角に曲がる。長さは5.0m×幅0.2m×深さ0.15mである。溝の南側の側石はかなり失われている。東端の北に曲がった部分の東側の側石は、0.5m程高く積まれている。この溝の西端近くで北側から溝S D4576が合流する。なお、この溝の延長線上に溝S D4577があり、レベル差は1.0m程あるが元はつながっていたのかもしれない。

S D4573 溝S D4574の南に位置する南北方向の石組溝である。長さは3.0m程で両端ははっきりしない。側石は小さい石が使われていて浅い。

この溝の南側に溝S D4575や礎石などの遺構が見つかったが、レベル差があって遺構面が異なっている。

## 中段

場所によって異なるが、上段とは1.0mほどレベル差がある。南半分は削平されていて遺構がほとんどない。北半分は礎石建物が2～3棟見つかったが、レベル差なしで重なっている。

S B4584 礎石が南北方向に5石並ぶ。東西方向にはこれに対応する礎石は見つからなかった。礎石両端は8.4mあり。柱間寸法は1.82mで6尺2寸5分となる。

S B4583 先の礎石建物S B4589と重なるようにL字状に石列があり、これが地形石と推定される。西と東は失われているが、西は段になっているのでこれ以上は延びないことから建物の規模は3間(6m)四方であろう。

S K4620 中段の中程の東端に位置する直径0.6m×深さ0.5m程の土壌である。中から銅銭40枚が出土した。この銅銭は緒銭状態が折れたのであろうか10枚ごとにくっついてい

た。

S V4619 中段と下段の境にある石垣で高さは0.5~0.6mある。自然石を2~3段積んでおり、北1/3は石垣が失われている。石垣の残存部分は30m程である。南端から8mの所に階段と推定される所がある。長さ2.4mにわたって笏谷石を扁平に2段積んでいる。

## 下段

中段とのレベル差は、先の石垣の高さである0.5m前後である。中央やや南寄りに石組みの溝が東西に走る。この溝を境に大きく遺構の性格が異なると考えられ、北側は池状の遺構や火を受けた炉のような石敷があるところから日常雑舎群があったエリアで、南側は遺構がほとんど見られなかったことから、広場的なところであったと推定される。

S D4579 下段中央やや南寄りの位置に、東西方向に走る溝である、確認された長さは20m程で、幅は0.4mである。南側の側石はほとんど失われており、西端もはっきりしない。この溝は石垣S V4619の下に潜っていく。

S X4597 不整形な池状の遺構で、東と北側に石の護岸があるが南西側はなだらかに上がっていてどこから池になるのかはっきりしない。深さは0.5m程である。ほとんど傷んでいた板や竹筥などの木製品と笏谷石の狛犬が出土した。性格としては庭園の池の可能性も考えられる。この池の東にごく浅い溝S D4578がある。

S D4580 池状遺構の西に位置する東西方向の溝で、4m分残っていた。この溝の側石を礎石とした礎石建物S B4585がある。

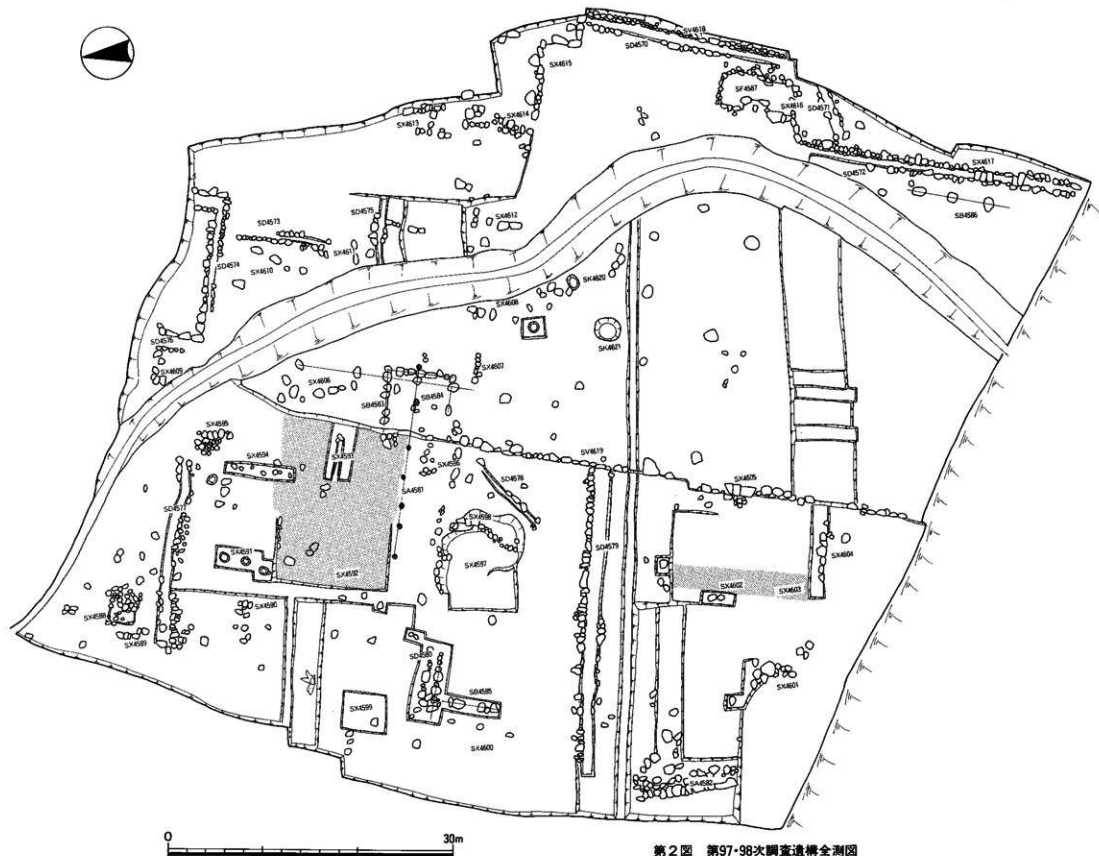
S A4581 掘立柱の柵列で、柱を7本10m分確認した。柱間は2mから1mと一定ではない。柱の太さは30cm程で丸柱である。中段まで延びていて、S B4583やS B4584とも重なっている。

S X4592 柵列S A4581からS X4594まで広がる薄い砂利敷で、場所によって2面ほどある。西側に向かって下がっていくが、西に入れた深掘りトレンチでは確認できなかった。

S X4593 木製の樋でほとんど朽ちていたが、1.5m程がわずかに残っていた。樋は西に向かって少し傾斜しているが、樋の行き先などは不明。

S D4577 かなり側石が乱れている石組の溝で12mほどあり、微妙に曲がっている。上段の溝S D4574はこの溝の延長線上にある。西端ははっきりしない。

S D4588 調査地区の北西隅にあって、1.2m×1.0mほどの石敷の炉である。石敷きの上面に炭や焼土があり、石敷きも焼けていた。



第2図 第97-98次調査遺構全測図

# 遺物

本調査地区における出土遺物の総点数は、5,572点と少ない。調査面積は2,400㎡であるが、西側約600㎡は削平されていて遺構がなく、遺物もほとんど出土しなかったので、調査面積1,800㎡として1㎡あたりの出土遺物の点数は3.10となる。この点数は多いところの約1/5、少ないところの約1/2でかなり単位面積当たりの出土点数も少ない。出土遺物の器種別内訳は表1のとおりで、中級武家屋敷の割合とよく似た傾向を示し、「安養寺」が一乗谷でも格式の高い寺院だったことを考えると、土師質皿の割合が低いといえよう。越前焼 甕は体部の破片が多く、時期が判るものが少ない。(1)は口縁帯が巡るⅡ群のもので、一乗谷ではあまり出土しない時期のものである。(2)は大甕の口縁部で口縁の幅は

器種				器種				器種				
器種		破片数	%	器種		破片数	%	器種		破片数	%	
日 本 製	前	甕	777	13.94	中 級 陶 器	碗	79	1.42	全 属 製 品	銅 鏡	216	3.88
		壺	232	4.16		皿	26	0.47		飾り金具	3	0.05
		鉢	46	0.86		鉢・盤	10	0.18		銅製品	1	0.02
		漆 鉢	241	4.33		香 炉	5	0.09		釘	4	0.07
		その他	138	2.48		花 生	22	0.39		鋸	1	0.02
	小計	1,436	25.77	その他	11	0.20	包 丁	0		0.00		
	土 師 質	皿	3,149	56.51	小計	153	2.75	絞 前		0	0.00	
		鉢	1	0.02	白 磁 器	碗	7	0.13		鉄製品	9	0.16
		壺	2	0.04		皿	81	1.45		その他	3	0.05
		その他	2	0.04		杯	1	0.02		小計	237	4.25
小計		3,154	56.60	その他		7	0.13	バンドコ	18	0.32		
			小計	96		1.72	臼	0	0.00			
鉄 種	碗	71	1.27	染 付 器	碗	25	0.45	鉢	5	0.09		
	皿	0	0.00		皿	61	1.09	盤	14	0.25		
	壺	40	0.72		杯	2	0.04	風 炉	16	0.29		
	その他	0	0.00		その他	1	0.02	井戸枠	0	0.00		
	小計	111	1.99		小計	89	1.60	磁 石	3	0.05		
灰 種	碗	8	0.14	中 国 製	338	6.07	品	1	0.02			
	皿	16	0.29	朝 鮮 製 陶 磁 器	碗	6	0.11	茶 臼	0	0.00		
	鉢・印皿	24	0.43		皿	0	0.00	その他	17	0.31		
	香 炉	1	0.02		鉢	0	0.00	小計	74	1.33		
	その他	4	0.07		壺	21	0.38	総 合 計	5,572	100.00		
小計	53	0.95	その他		2	0.04						
瀬戸・美濃計	164	2.94	小計	29	0.52							
瓦 質 土 器	火 鉢	23	0.41	タイ陶器	0	0.00						
	香 炉	0	0.00	船載陶磁器合計	367	6.59						
	風 炉	28	0.50	陶磁器合計	5,261	94.42						
	その他	23	0.41									
	小計	74	1.33									
国 産 陶 器	信 楽	25	0.45									
	その他	41	0.74									
	小計	66	1.18									
合 計		4,894	87.83									

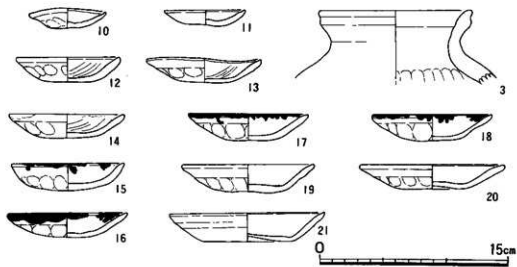
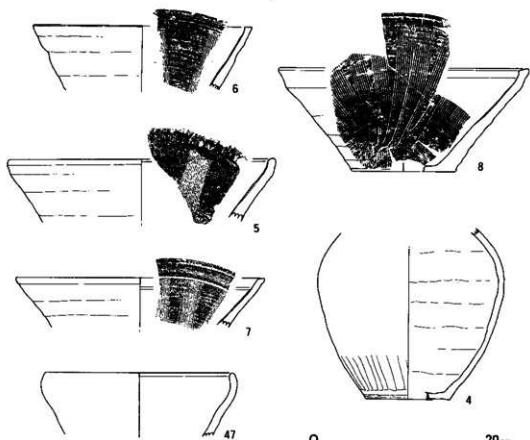
表1 第97・98次調査出土物組成表

3cmあり口縁下の突帯が丸くなっており、IV群のなかでももっとも新しいタイプIV群cに位置づけられる。(3)は壺の口縁部で口縁帯が残っているが内側の段を失っているところから14世紀後半頃と考えられる。(4)は小形の甕で口縁が失われている。肩部にへう記号がある。

(5)は、胎土が荒く表面はかなり荒れている。口縁部が内湾気味で、櫛目と櫛目の間隔が広い。(6)は口縁端部の沈線が消えた段階のもので、この時期の資料は少なくはっきりとは判らないが15世紀初頭頃に位置づけられる。(7)は口縁端部から口縁下の沈線までの距離がありⅢ群と考えられる。(8)は播目がほぼびっしり刻まれ、口縁下の凹線は無くなりかけているIV群最終時期の播鉢である。(9)は底部に断面三角の貼付高台がついている。高台はやや退化しており、口縁部は失われているが、口縁端部に沈線が巡っていたのはまちががなく、I群に属する。なお、内側には播目がない。この時期の播鉢は、一乗谷では第10・11次調査と第24次調査地区から出土しているが、その他の調査地区からは出土していない。

この時期のに相当する壺や甕は、各調査地区から出土しているが、播鉢の出土地区に限られるのは、播鉢が消耗品であることを物語っている。

土師質土器 (10・11)は口径が6cmで、見込み中心までナデを施したC類aの皿である。(12~18)は口径が9cm強のC類bの皿である。(15)は体部の立ち上がりの角度が大きい点が他のC類と異なっている。(19~21)は、見込みを横にナデにおいて、立ち上がり部だけにナデを施したD類の皿である。口径は(19)がやや小さくて11cm、(20・21)は12cmを少し超える。(22)は見込みまでナデを行っている点はC類とほぼ同じ成形技法であるが、陣笠のような形をしていて底部がとがっているA類の皿で、口径が6cm前後に集中する。このタイプの皿は、この御所・安養寺でしか出土していない。(24)は底部がとがり気味でC類とA類の中間的な形をしている。(25)以後は、器壁が薄く胎土が白いものを集めた。(27~29)はC類の土師質皿で、(25・26)は口径が6.5cmで、(28・29)の口径は9.0cmである。C類はこの2つのサイズに集中する。(30~32)はD類の土師質皿である。特に(29~31)は器壁が薄く、厚さ1.0mmほどしかない。(32・33)はやや器壁が厚いが体部から口縁部にかけてよく延びている。器壁が薄いものは全体に器高が低くて底部が平らなことが多い。ただし、用途については灯明皿にも使用されたとみえて、(30)には灯心タール跡が残っている。このタイプの土師質皿は、安養寺地区で多いように思われるが、他の地区でも一定量出土しており、必ずしもこの地区の特徴とはいえない。福井城本丸跡から出土している近世初期の土師質皿の器壁が薄いことから、時期的な差とも考えられるが、層位的な確認はできていない。



第3圖

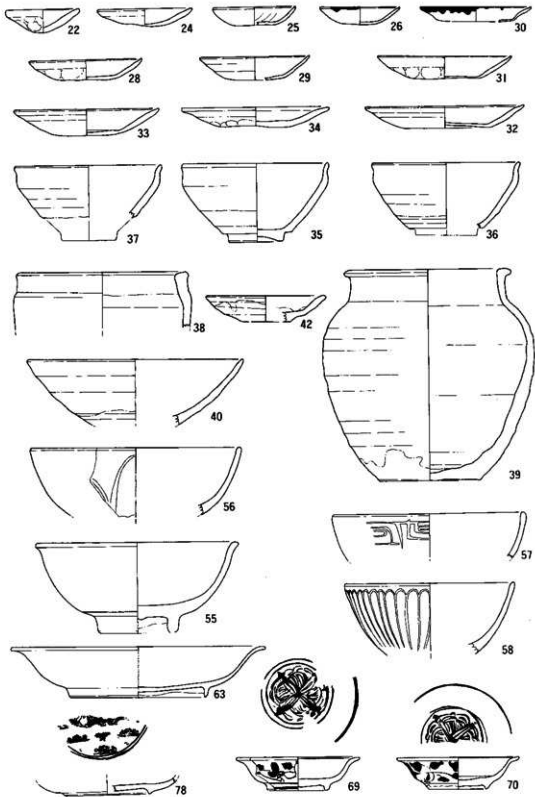
瀬戸・美濃製品 天目茶碗は71破片出土している。図示した(35~37)の3点はいずれも作りが直線的で16世紀中頃の様相を示している。(38)は口径が18.5cm程の鉄軸水指で、水指としては小さい部類に入る。(39)は口径12cm、最大径17cm、高さ17cmの鉄軸壺で、口頸部は直立する。体部に対して口頸部が大きい。表面にはロクロ成形の跡が残る。

灰釉は全体に少なく、碗は8点皿も16点しか出土していない。(40)は大きく開く灰釉碗で、口径は17.5cmある。この種の灰釉碗は幅の広い蓮弁文が刻まれていることがあるが、これにはない。腰部から下は露胎である。(42)はいわゆる緑釉皿で、底部には回転糸切りの跡が残る。この2点は15世紀前半から中頃の製品で、一乗谷ではあまり出土しない。(41)は端反の灰釉皿で口縁部が大きく外反しているところから、この種の皿としては古い方に属する。(43)は灰釉の竹の節型香炉で、(45)は形は同じであるが、無釉で胎土も細かい灰色で生産地を異にする。(44)は小形の灰釉壺で、腰部から下が露胎となり、底部に、回転糸切りの跡が残る。これも15世紀前半の所産であろう。

瓦質土器 (47)は口縁近くで内湾する瓦質の鉢で直径は30cmある。焼成が甘く表面が白くて荒れているので、成形・調整跡のなどは不明な点が多いが、内面の下半分はヘラによるナデ調整がみられる。(46)は瓦質の羽釜で、この部分しかないため全体の形は十分には判らない。3cm程の断面三角の鈎が付き、口径も30cmを少し超える程度と思われる。これまで一乗谷では瓦質土器は香炉・火鉢・風炉に限られていて、鉢・羽釜が出土したのは初めてである。なお、瓦質の鉢については、坂井郡丸岡町遺に出土例がある(福井県埋蔵文化財センター 1994)

中国製陶磁器 青磁は14・15世紀に位置づけられるものが数点あり、青磁碗の数が少ないので古いタイプの碗が目立った。(56)は幅の広い蓮弁文碗で、釉色は緑がかった青である。この種の碗としては腰部が丸い。(57)は口縁部近くに雷文帯が巡る碗で、釉色は半透明の緑青色である。(55)は口縁端部が外反する無文の碗で、腰部に沈線が巡る。釉色は緑がかった青である。高台裏が露胎となっている。(58)は幅の狭い蓮弁文碗で、釉色は青みが強い。(59)は線刻の蓮弁文碗で、釉色は褐色がかった緑色である(60・61)は無文の碗である。以上は龍泉窯系の青磁であるが、(62)は別の産地の青磁であろう。形としては浅い平碗で、釉色も白い緑褐色となり、腰から高台にかけて洗鉄が施されている。花瓶が22点ほどあり、(48)は体部・頸部は砧型で口縁が開く花瓶、(49~51)はおそらく同一個体で、体部に浮き牡丹のある花瓶である。(52~54)は青白磁の梅瓶で、体部には渦巻き文が全面に施されている。

白磁は皿がほとんどで、(63)は口径20.5cmもある端反皿である。この種の皿としてはもっとも大きい部類にはいる。(64)はやや青みのある端反皿で、器壁に厚みがある。(65~67)



第4圖





は乳白色の釉がかかる内湾する皿で、15世紀代のものである。

染付は出土点数は、碗・皿合わせて86点ほどあったが、小片が多かった。碗はD群、皿はB1群が多い。(68)は見込みが饅頭心になるE群の碗である。(69~72)は外面が唐草文、見込みに十字花文を描く皿でB1群に属する。(73)は外面が密に展開する唐草文で見込みは羯磨文である。(71)は見込みの十字花文がかなり固化している。(74)は外面が無文で見込みは草花文である。(75・76)は外面唐草文で、口縁内側に四方禪がめぐるB2群の皿である。この皿の唐草文は輪郭を描いてから中を塗りつぶす手法で描かれている。また、口縁部は切り込みがあるので、おそらく稜花皿であろう。(77・78)は内湾するE群の皿で見込みに人物文などが描かれている。

**朝鮮製陶磁器** 白磁の皿が2点、堅手の茶碗(79~81)が4点、そのほか叩き締め壺(82・83)が15点ほど出土した。

**金属製品** 銅銭が中段のS K4620から176枚出土した。40枚ほどくっついた3本と20枚前後がくっついたものとばらけたものからなる。97・98次調査で出土した銅銭の種類の内訳は表2の通りである。a~cは昭和45年の調査で緋金として出土したもので、dは土壌S K4620からの出土銭。eは調査地区全体から出土したものである。

**石製品** 安養寺周辺には多数の石仏・石塔が確認されており、石仏石塔が集中する寺院のひとつである。今回の調査でも畦などから石仏・石塔が多数出土した。右写真は池状遺構S X4597から出土した狛犬である。同じサイズの狛犬が上城戸から出土している。(岩田)



福井県埋蔵文化財センター 1994 「曾々木谷田遺跡」

表4 支那守山工の銅銭

No	銭貨名	国名	初铸年	a	b	c	d	e	合 計	No	銭貨名	国名	初铸年	a	b	c	d	e	合 計
1	開元通寶	唐	621	9	6	11	16	1	43	42	慶元通寶	南宋	1195						
2	乾元重寶	"	758	3		1	3		7	43	嘉泰通寶	"	1201				3		3
3	乾德元寶	前 蜀	919							44	開禧通寶	"	1205						
4	漢通元寶	後 漢	948							45	嘉定通寶	"	1208			1	4		5
5	周通元寶	後 周	955		1				1	46	大宋元寶	"	1225						
6	唐國通寶	南 唐	959							47	紹定通寶	"	1228						
7	宋通元寶	北 宋	960			2			2	48	端平元寶	"	1234						
8	太平通寶	"	976	1	1	1		1	4	49	嘉熙通寶	"	1237						
9	淳化元寶	"	990				2		2	50	淳祐元寶	"	1241		1				1
10	至道元寶	"	995	1	2		1		4	51	皇宋元寶	"	1253						
11	咸平元寶	"	998	1	1	2			4	52	開禧通寶	"	1259						
12	景德元寶	"	1004	1	2	3	4	1	11	53	慶定元寶	"	1260		1	1	1		3
13	祥符元寶	"	1009	2	10	9	3	1	25	54	咸淳元寶	"	1265						
14	祥符通寶	"	10019	2	3	1	5		11	55	天盛通寶	西 夏	1158						
15	天禧通寶	"	1017	3	3	4	4		14	56	正隆元寶	金	1157						
16	天聖元寶	"	1023	7	4	5	11	2	29	57	大定通寶	"	1178						
17	明道元寶	"	1032	1					1	58	至大通寶	元	1310						
18	景祐元寶	"	1034	3	3	1	2		9	59	至正通寶	"	1350						
19	皇宋通寶	"	1038	13	1	6	18	4	42	60	天定通寶	天 完	1359						
20	至和元寶	"	1054	3	1	1	1	1	7	61	大中通寶	明	1361						
21	至和通寶	"	1054	2	1				3	62	洪武通寶	"	1368	1	5	2	2		10
22	嘉祐元寶	"	1056				4	1	5	63	永康通寶	"	1408				2		2
23	嘉祐通寶	"	1056	3	2	2	1	3	11	64	宣德通寶	"	1433						
24	治平元寶	"	1064	1	1		4	1	6	65	弘治通寶	"	1488						
25	治平通寶	"	1064		1				1	66	嘉靖通寶	"	1522						
26	熙寧通寶	"	1068	9	6	11	18	1	45	67	朝鮮通寶	朝 鮮	1423			1			1
27	元豐通寶	"	1078	8	12	9	20	8	57	68	紹豐通寶	安 南	1341						
28	元祐通寶	"	1086	11	6	8	14	2	41	69	大治通寶	"	1358						
29	紹聖元寶	"	1094			2	5	2	9	70	順天元寶	"	1428						
30	元符通寶	"	1098	3		1	2	2	8	71	紹平通寶	"	1434						
31	聖宋元寶	"	1101	3	5	3	4	1	16	72	大和通寶	"	1443						
32	大觀通寶	"	1107	2	5	2	1		10	73	延寧通寶	"	1454						
33	政和通寶	"	1111	2	7	2	5	1	17	74	光順通寶	"	1460						
34	宣和通寶	"	1119		1	1	1	1	4	75	洪德通寶	"	1470						
35	咸雍通寶	遼	1065							76	洪順通寶	"	1509						
36	建炎通寶	南 宋	1127							77	玄乾通寶	"	-						
37	紹興元寶	"	1131							78	治平聖寶	"	-						
38	紹興通寶	"	1131		1				1	79	大世通寶	琉 球	1454						
39	乾道通寶	"	1163							80	世高通寶	"	1461						
40	淳熙元寶	"	1174							81	寶統不能					10	1		
41	紹熙元寶	"	1190	1	1	1			3		合計枚数			94	95	94	176	36	495

## 安養寺と足利義昭の御所

安養寺（あんにようじ）は現在福井市足羽一丁目に所在する浄土宗西山禪林寺派の寺院である。もと武生市安養寺町にあり、文明5年（1473）一乗谷に建てられたといわれる。明治9年（1876）の地籍図にみえる越前国足羽郡東新村町五字五所・八字安如寺口の地字は安養寺とそこに設けられた御所に由来するものとみられる。この御所は足利義昭が將軍就任以前に一時滞在したところである。

安養寺は一乗谷の中でも比較的大きな寺院だった。長享2年（1488）信濃善光寺から下向の途次一乗谷を訪れた真盛上人は安養寺で説法を行ない、当主朝倉貞景もこれを聴聞した。貞景は同年8月28日ここで秘蔵の大小の鷹や逸物の鷹を放ち、鳥籠や鷹道具を焼き捨てた。その翌日、前日に放たれた鷹1本が安養寺の棟に飛来し、真盛上人はこれに十念を授け、上洛の途についたという。真盛上人の教えは越前で熱狂的な支持を得、府中引接寺をはじめとして岡西光寺・新庄放光寺・大野青蓮寺・蓮光寺の5ヶ寺、その他130ヶ所の道場が建立されたという。朝倉貞景が真盛を安養寺に迎えたことは当時の安養寺の規模を物語るものであろう。その後一乗谷にしばしば滞在した清原宣賢は天文16年（1547）から17年にかけて安養寺で『大学章句』や『中庸章句』を講義している。足利義昭が安養寺を御所として滞在したのもこうした規模の大きさを前提とするものであろう。

一乗谷に滞在した將軍に足利義種（義材・義尹）がいる。彼は明応2年（1493）細川政元によって起こされた政変により失脚し、畠山政長の分国だった越中へ下向した。そして朝倉貞景を頼って上洛を遂げようとし、明応7年（1498）9月一乗谷に入り、貞景は彼を阿波賀の含蔵寺に入れた。含蔵寺は建仁寺洞春院の末寺で「公界所」といわれているが、やはり相当の規模を持った寺院であろうと思われる。また明応4年（1495）8月奥州の白川政朝が上洛した時に貞景はその宿を心月寺（朝倉教景の菩提寺）に依頼している。このように朝倉貞景は上級の武士・僧侶等の寄宿を一乗谷の有力寺院に求めた。これらの大寺院はいずれも一乗谷の城戸の外側に位置しているが、寄宿を寺役として行なって朝倉氏に奉仕したものと考えられる。

安養寺の建物は天正元年（1573）8月の織田勢による一乗谷放火やその後の一向一揆の攻撃により破壊されたとみられるが、寺伝によれば門だけが焼け残り、現在地に移されたといわれる。それも昭和23年（1948）6月の福井地震で倒壊し現存しない。

足利義昭は永禄8年（1565）5月三好勢によって殺された將軍義興の弟である。当時彼は奈良の興福寺一乗院に住して覺慶といったが、兄弟のうち唯一人生き残ったので將軍の後継者とみなされた。覺慶は母方の叔父大覚寺義俊の補佐により、朝倉義景と連絡して同

年7月28日奈良を脱出し、近江甲賀の幕府御供衆和田惟政の城に至った。その後彼は矢島に移り、還俗して義秋と名乗った。義秋はここで諸方の大名に出陣を命じ、上洛を遂げようとした。しかし当面の三好勢の攻撃から逃れるために永禄9年(1566)8月29日近江矢島から若狭へ向い、1ヶ月あまり後の9月8日若狭から越前の敦賀に移り、朝倉景恒の敦賀城に入った。ところが翌永禄10年(1567)正月義俊が没し、3月には坂井郡の有力国人堀江氏が加賀勢と組んで朝倉義景に対して謀叛を起こすなど不利な情勢が続いたため、その敦賀逗留は1年以上にも及び、結局永禄10年11月21日亥刻一乗安養寺に着いた(補注参照)。朝倉義景は義昭を守り立てたが、結局義昭は織田信長を頼って永禄11年(1568)7月16日一乗谷を出て美濃に移り、西庄立政寺に入った。その後義昭は信長に奉じられて上洛を遂げ、同年10月征夷大將軍に任じられた。しかし義昭はしだいに信長との対立を深め、元亀4年(1573)7月山城槇島城に挙兵したが、信長方に鎮圧され、その後義昭は河内若江城、紀井由良興国寺・備後鞆などを流浪することになる。足利義昭が足跡を残したところはきわめて多いが、その居所の相当部分が発掘調査によって確認されたのは上洛後信長が義昭のために築いた旧二条城と安養寺だけであり、今回の調査は室町、戦国期の歴史を考える上で大きな意義を持つものである。

補注 足利義昭の一乗谷入りの日時について『朝倉始末記』は10月21日敦賀を出発し、府中龍門寺に入り、翌日すなわち10月22日申刻に一乗安養寺に着いたとする。一方『越州軍記』は11月21日亥刻の到着とする。この両書は共に軍記物であり1次的な史料ではないが、一般的に『越州軍記』の本文が『朝倉始末記』の本文よりもより正確な日時を伝えることが多い。確実な史料である『顯如上人御書札案留』では本願寺顕如が加越和与の御内書を受領し、これに同意したのが11月3日のこととされるが、この書札の日付は後からさかのぼって付けられたものとされる。また近年紹介された『安楽山産福寺年代記』には永禄10年の項に「此年加越一和ス、御所ヨリ御噯也、從加州為人質杉浦又五郎越久、同十一月十四日越前之城津波・火之谷・黒谷退城ス、又当国ニハ松山・堂前・月津退城ス」と記されている。この記事はより記録性が高く、この部分についても軍記物のように年代の誤りはないので、永禄10年11月3日に本願寺顕如が加越和与の義昭の命を受け入れ、11月14日に加賀江沼郡に所在する両者の城からの軍勢退却がなされたことは事実である。したがって足利義昭は越前朝倉氏と加賀一向一揆の和睦が達成されて背後の安全を確保して一乗谷に移ったものとみられる。なお足利義種・義昭はしばしば改名しているが、本稿では叙述が煩雑になるため後の名を用いた。(佐藤)

### 3. 第96次調査

本調査は、福井市城戸ノ内町字上川原における梅田直樹氏宅地の現状変更申請に伴う事前調査として実施したものである。調査対象面積約600㎡、調査期間は平成8年4月23日～5月23日である。発掘調査廃土置き場を確保する関係上、東西に二分して、西半を先行して調査した後、残る東半の調査を行った。なお、この調査区は1987年実施の第59次調査区の北に隣接する。

#### 遺 構

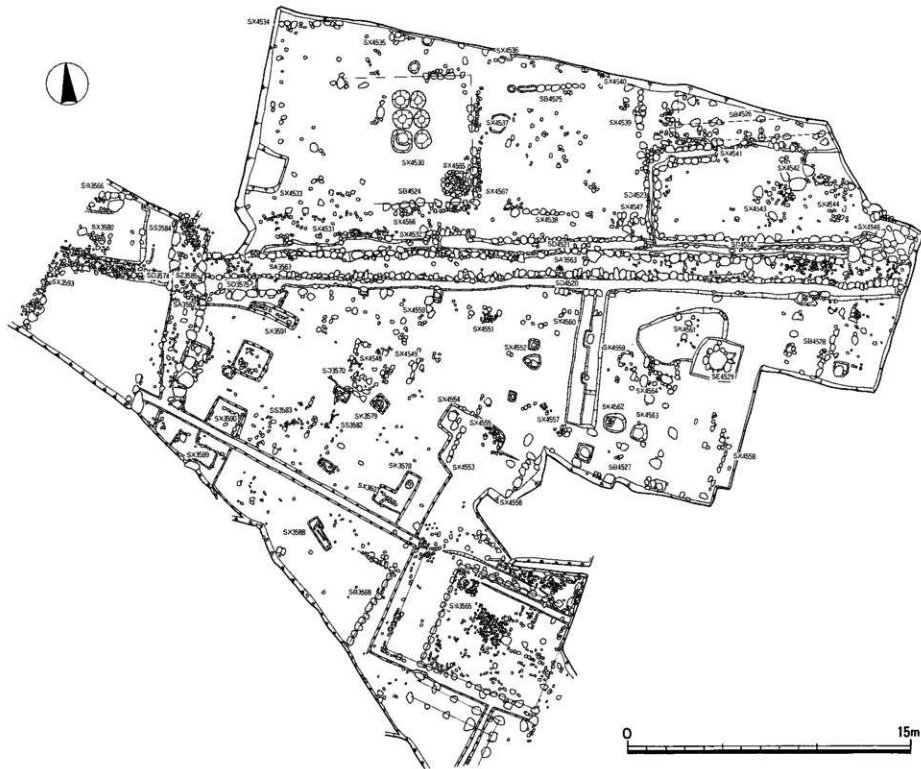
本調査区においては、中央を東西に走る土塁をはじめとして、良好に遺構が遺されていることが判明した。検出した主な遺構は、土塁1、溝4、礎石建物5、井戸1、越前焼大甕埋設遺構1等である。これらの遺構から、比較的規模の大きな屋敷の存在がうかがわれた。以下、その概要を報告する。

S A 3563 調査区中ほどで検出された東西方向の土塁。幅は約2m、検出長は33mほどである。1987年実施の第59次調査において一部が検出されていたもので、この土塁によって、調査区は大きく二分されることは前述した通りである。その規模や後述する建物等の方位がこの土塁を境にして異なること等から、屋敷を区画する遺構と考えられる。基底部の石垣が南北両面とも1～2石遺されている。この土塁の石垣に使用されていたと推定される多量の石が主として北側に見られたことから、本来はさらに積み上げられていたものと考えられる。なお、地図座標系で見ればE4°Sであり、ほぼ東西を示している。

S D 4520 中央の東西方向土塁S A 3563の南に添う溝。幅0.6m程度と見られ、深さは0.4～0.5mで、比較的規模が大きい。土塁南面石垣が北側石を兼ねている。今回の調査においては南側石はほとんど検出されていないが、溝部は焼土が明確に落ち込んでいた。なお、この溝とつながる暗渠S Z 3585等が西の第59次調査で検出されている。

S D 4521・4522 中央の東西方向土塁S A 3563の北に添う溝。東西でやや様相が異なり、西は土塁北面石垣がそのまま南側石となるのに対し、東では土塁北面石垣とは別に南側石を設けている。そこで西半部をS D 4521、東半部をS D 4522と区分することとした。S D 4521は北側石を欠くところもあるが、幅0.4m、深さ0.2m程度と考えられる。S D 4522は、幅0.2m、深さ0.15mほどの規模である。南側石と土塁北面石垣との間隔は0.5mほどである。

S D 4523 調査区北半、中ほど東寄りで検出された鍵形に曲がる溝。土塁に沿う東西方向溝に合流する南北方向部が約4m、この北から東に延びる東西方向部が約3.5mである。



第5圖 第96次調査遺構全測図

深さは0.1m程度と浅く、幅は南北方向部が0.2m、東西方向部が0.3mほど。

S B 4524 調査区北半、西寄りで見出された礎石建物。西面に不明な点も残されているが、東西4.7m×南北6.6mの規模と考えられる。南と東面の礎石列が比較的良好に遺されており、その間隔は0.5mほどと密であるが、よくみると、礎石の大きさに長径が0.3m程度のものと、0.5m程度のものの二種あって、これが交互に配置されている場合が多く、基本的には6.2尺(1.88m)を基準とする建物であった可能性と考えられる。南と東面の礎石列の外側約0.3mにこれに添う石の並びS X 4566・4567が存在するほか、東南隅には礎石敷S X 4565がともなう。また西北部には越前焼大甕埋設遺構S X 4530も存在している。

S B 4525 調査区北半、東北部で見出された礎石群。北へ続くと見られ、規模は明らかでない。礎石は上面が平滑なものを選んで用いており、その配置から、基本的には6.2尺を基準とする建物であったものと考えられる。

S B 4527 調査区南半、中ほど南寄りで見出された礎石建物。礎石は大振りであって、長径が0.5～0.7m程度のものを用いている。基本的には6.2尺を基準とするものと考えられるが、規模等は明確でない。またこの建物方位は東西方向土塁S A 3563によって区分される北半の建物群S B 4524等がほぼこの土塁に平行するものとは大きくことなり、約26°振れている。この方位は先の第59次調査で見出されている東西方向土塁にほぼ等しい。

S B 4528 調査区南半、東端で見出された礎石建物。基本的には6.2尺を基準とするものと考えられ、東西、南北とも2.5間を見出しているが、さらに南に延びている可能性が考えられる。方位はS B 4527と等しい。

S E 4529 調査区南半、東寄りで見出された石積の井戸。ほぼ天端まで遺されており、その口径約1.0m、深さ2.4m、礫層に直接石を積み上げており、若干下部の口径は大きいが見出し等は見られない。

S X 4530 越前焼大甕を埋設した遺構。径1.0m、深さ0.5mほどの6個の埋設跡が南北に3個ずつ2列に並ぶ。この穴からは多量の越前焼大甕の破片が出土したが、抜き取られた後に廃棄されたと考えられ、底部が原位置を保ったものは見られない。

S X 4542 調査区北半、東端で見出された蹲踞状遺構。この付近では産出しない長径1.0mの扁平な安島石を用いており、これを中心にして馬蹄形に石を配している。(吉岡)

## 遺物

本調査により出土した遺物総点数は25,691点であり、調査面積に対する1㎡あたりの密度は40.5点という高密度を示している。遺物点数のうち最も多いのは土師質皿の21,067点であり全体の82%を占めている。この土師質皿のうち大部分は土師質皿廃棄土壌であるS

器種				器種				器種				
器種	破片数	%		器種	破片数	%		器種	破片数	%		
日本製陶器	越前焼	壺	2,628	13	青磁	碗	61	0.8	金屬	銅 銭	41	0.3
		壺	334			皿	66			釘	21	
		鉢	99			鉢	8			その他	13	
		播 鉢	241			盤	38			計	75	
		火 桶	35			壺	7			石製品	バンドコ	
	計	3,337	香 炉	15	盤	20						
	族 輪	碗	56	酒 会 壺	4	砥 石	6					
		壺	24	酒 しょう台	1	硯	6					
		皿	8	その他	4	玉 石	11					
	灰 輪	香 炉	1	計	203	白	2					
その他		5	碗	6	磁	4						
計		94	皿	224	壺	24						
土師質	碗	21	0.36	壺	1	0.9	木製品	炭 片	14			
	皿	21	0.27	壺	10			漆 片	8			
	鉢	21		角 環	1			漆 桶 (割付)	2			
加 皿	9	その他		2	板 片	2						
瓦質	計	72	0.27	青	1	0.01	コルク	1				
	皿	21,057		白	1		竹	1				
	土 鈴	4		磁	2		その他	10				
須恵器	その他	6	82.0	計	244	0.9	計	38				
	計	21,067		青	1		0.15	陶磁器類	114			
	羽 釜	61		白	1			留 金	4			
須恵器	皿	3	0.28	染	33	0.7		その他	15			
	鉢	4		皿	109		0.5	計	133			
	その他	8		香 炉	1			0.01	種 子	2		
計	76	環	3	0.61	骨	4						
須恵器	壺	2	0.01		付	8	1.6		計	6		
	鉢	1			中	3		25,691	合 計	408		
	計	3		国	3	総 合 計			25,691			
合 計	計	24,649	95.9	製	14	0.1	0.1		2.5			
	朝 陶	1		製	7							
	鮮 磁	3		計	27							
朝 陶 鮮 磁 製 器	碗	1	0.01	0.1	碗	1	0.01	2.5				
	壺	3			壺	3						
	その他	1			その他	1						
計	5	0.01	2.5	計	5							
合 計	635			合 計	635							

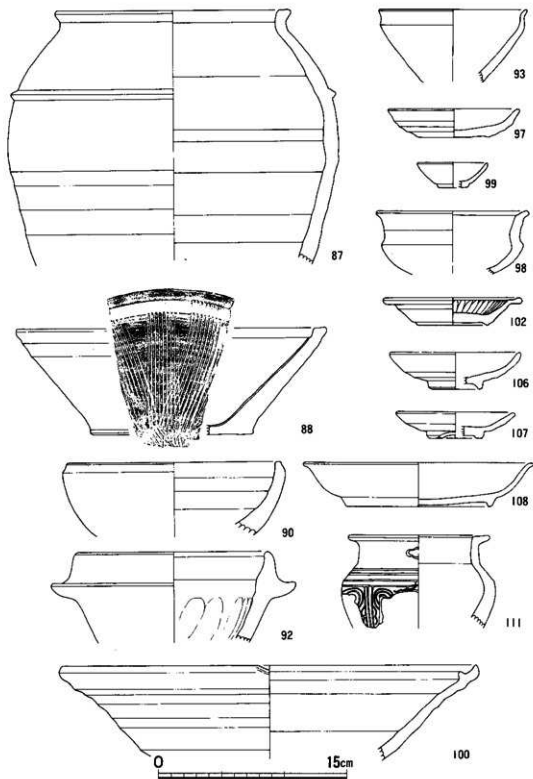
第96次調査出土遺物組成表

K4561からの出土である。

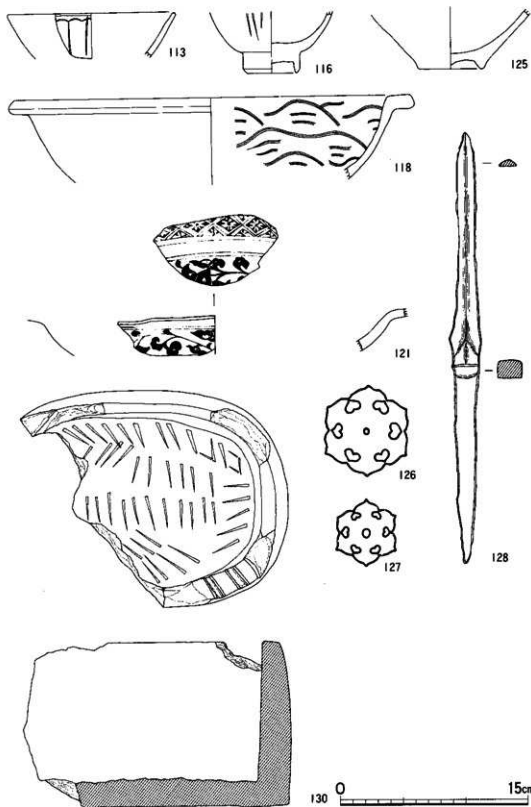
越前焼 (87)は口径18.6cmを測る壺である。体部には粘土紐による凹凸が顕著に見られ、肩部には断面三角形状を呈する凸体を1状巡らす。また、内外面ともに降灰による釉が認められる。(88)は口径24.5、器高8.5cmを測る播鉢である。口唇部上面は僅かな凹状を呈し、口縁部内側には1状の段を作る。体部内面および底部内面には11本を1単位とする播目を密に有する。(90)は口径17cmを測る鉢である。

羽釜 (92)は15.3cmを測る土師質の羽釜である。体部内面には指頭圧痕を残す。





第6圖



第7图

瀬戸・美濃焼 (93)は口径11.8cmを測る鉄軸碗であり、(97)は口径10.5cm・器高2.3cmを測る鉄軸皿である。(99)は口径5.6cm・器高2cmを測る鉄軸小皿である。体部外面上半から底部内面にかけて施釉しており、底部外面から体部外面下半は露胎である。(98)は口径12cmを測る鉄軸香炉であり、腰部外面から口縁部内面を施釉する。(102)は口径10.8cm・器高2.2cmを測る灰軸皿であり、底部には断面三角形を呈する高台を有する。体部内面から底部内面にかけては丸ノミによる削りを密に施す。(100)は口径33cmを測る灰軸鉢であり、口縁部には片口を有する。

中国製陶磁器 (106)は口径10.4cm・器高3cmを測る白磁皿であり、全体的に器厚がやや厚い。底部外面から腰部は露体としている。(107)は口径9.5cm・器高2.1cmを測る白磁皿であり、底部には桜高台を有する。全面を施釉するが底部内面には目跡を残す。(108)は口径18.4cm・器高3.5cmを測る端反りの白磁皿である。(111)は口径11.2cmを測る青磁器台である。体部には大形の透かしを、頸部には小形の透かしを各々有する。(113)は口径13.4cmを測る青磁碗である。体部は直線的に上外方へ伸び、外面には線描蓮弁文を有する。(116)も青磁碗であるが、体部上半を欠失する。体部外面には線描蓮弁文を有する。(118)は口径31.6cmを測る青磁盤である。内湾しながら伸びる体部は口縁部で外方へ強く屈曲する。体部内面には線描文を有する。(121)は染付盤の小片であるが、朝倉氏遺跡において普遍的に出土するものとは異なり、古い様相を呈するタイプである。

朝鮮製陶磁器 (125)は蕎麦茶碗であり、体部上半を欠失する。底部外面には断面三角形の高台を有し、底部内面には目跡を3ヶ所残している。

金属製品 (126・127)は銅製釘隠しであり、(126)は直径7.3cm・厚さ1cm弱を測り、(127)は直径5.4cm・厚さ1cm弱を測る。(126・127)は2枚重なった状態で出土している。(128)は34.5cmを測る槍先であり、基部には木質を残している。

石製品 (130)は笏谷石製のバンドコである。体部内面から底部内面にかけては使用にともなう煤が付着している。(水村)

## 5. 石造遺物調査

昨年に引き続き、西山光照寺の石造遺物のうち、平成6年度の第86～87次調査および7年度の第90次発掘調査により出土した石造物と、大型の石仏2体を乗せていた台座2基を解体して、調査可能になった石造物について行なった。現在も調査は継続中であり、全体数の約2/3の調査を終えた段階で、今回は№779～№1642まで調査した。

調査方法は昭和47～49年にかけて行われた一乗谷の石塔・石仏の予備調査を参考とし、番号を付け、計測、写真撮影をし、銘文の残るものについては解読し拓本をとった。また出土したものについては、西山光照寺域内のどこから出土したかによって分けて調査を進めている。

今回の調査では、山裾から出土したものと、2基の台座のうち正面向かって右側の台座を崩したものについて行なった。山裾から出土した№779～№1173のうち、大半が平成6年度発掘調査の耕作土・床土除去作業中、半分埋もれた状態で出土した。№1033～№1045については山裾の墓地S T 4424周辺から出土したものである。一石五輪塔は144体あったが、完形は1体だけであった。部位ごとにみても空風輪が54体、地輪が56体あったことから少なくとも50個体以上と考えられる。組合せ五輪塔は水輪と火輪が1つづつ出土した。板碑は19体確認したがいずれも一部分のみであるため正確な数は不明である。また石仏も57体を数えるが割れているため個体数はこれよりも少ないと思われる。宝篋印塔は笠部が1体出土し、隅飾突起の部分も出土したが塔身などはなかった。この他石龕の一部が32体、五輪塔・宝篋印塔の基礎が49体出土した。

右台座を崩して調査した石造物は、№1174～№1642である。一石五輪塔が380体あるが、完形は1体もなく、大半が3つに割れている。部位ごとでは空風輪が156体、地輪は113体であった。長年風雨にさらされる状態であったため彩色はほとんど残っていないが、2体ほど梵字に朱や黒の色が残っているものがあった。組合せ五輪塔は空輪が直径29.0cm以上の大型のものが2体あったが、他の部位はなかった。笠塔婆は四面に石仏を彫った塔身が1体と高さ19.8cmを測る笠部を1体確認した。塔身は割れていたので接合した。幅約25cm、高さ約50cmを測り、石仏が彫られるが摩耗が激しく判別はできなかった。板碑は3体確認できたが、いずれも欠けた一部分である。石仏は47体を数え、地藏菩薩が18体、如意輪観音が1体、阿弥陀如来が2体、右に阿弥陀、左に地藏の二尊を彫ったものが1体判別できるが、その他は欠損のため不明である。大型のものとしては幅約64cmの座像が1体あるが、頭部が欠損しており、手印・持物なども摩耗しているため何の像かは判別できない。この他には石龕、基礎、供花器があった。(宮永)

## 注

- 石造物の名称については、『一栗谷石造遺物調査報告書1』の分類名称を踏襲する形をとった。また、板碑については『板碑の総合研究②地域編』の中部・近畿地方の例を参考にした。
- 既に予備調査済みのものも、番号が消えてしまっていたり、読みにくくなっているものが多かったので、重複を確認した上、改めて番号を付けた。

## 銘文集成

- (凡例)
1. 寸法は単位cmで、それぞれの最大値を記入した。
  2. 五輪種字が四面に転回しているものは、四転とした。
  3. 梵字は銘文に加えていない。
  4. 欠字は□で表わす。また/は欠けていることを表わす。
  5. 備考欄の番号は前回の予備調査で付けられた番号である。

番号	場所	種類	形状	総高	地輪高	水輪高	火輪高	空輪高	西暦	銘文	備考
780	山麓	一石五輪塔	地	24.0	24.0 厚さ 18.5					九月三日	
784	山麓	一石五輪塔	地	23.0	23.0 18.5 溝厚さ 18.0				1604	慶長六年辛丑 為頼居士前大舟也 潤十一月廿四日	丹は吾國の貫字体
790	山麓									門 権門 西神門 二年九月廿八日	
809	山麓	一石五輪塔	火水地	37.5	18.3 14.3 溝厚さ 13.3		9.3			西見童子 六	割付線あり
815	山麓	一石五輪塔	地	14.6	14.6 11.2 溝厚さ 10.5				1561	永禄四年 御生童子 五月六日	割付線三本
816	山麓	一石五輪塔	地	21.5	21.5 17.0 溝厚さ 17.0				1535	天文四年未年五月三日 妙定禪定尼 江和北郎 人夫	
818	山麓	一石五輪塔	地	19.5	19.5 溝厚さ 18.5					天文□□ 権人僧都 十月廿	地輪梵字の左右に文字があるが読めず
824	山麓	一石五輪塔	空風火水地	48.0	14.0 14.3 溝厚さ 14.3	15.7	9.1	12.6		善賢 六月六日	
831	山麓	一石五輪塔	地	21.7	21.7 16.5 溝厚さ 15.8					道一	
838	山麓	一石五輪塔	地						1545	文十四年乙巳 大木童子 月十八日	
843	山麓	一石五輪塔	地	18.1	18.1 18.0 溝厚さ 17.0				1511	善仲禪門 永正八年巳七月廿日	Ko 236

番号	場所	種類	形状	総高	地輪高	水輪高	火輪高	空輪高	西暦	紀文	備考
844	山裾	一石五輪塔	地	21.5	21.5 地厚さ 14.5				1541	天文十年辛丑 妙輪 <small>口</small> 九月十三日	
845	山裾	一石五輪塔	地	22.5	22.5 地厚さ 16.0				1535	天文四年 妙輪比丘 正月廿一日	
857	山裾	一石五輪塔	地	19.5	19.5 厚さ 12.8				1538	天文七年 宗跡神門	
860	山裾	一石五輪塔	地	22.5	22.5 地厚さ 15.5					<small>口</small> 三年 菊 <small>口</small> 宗徹居士 四月十八日	
862	山裾	一石五輪塔	地	25.0	25.0 地厚さ 17.0					<small>口</small> 元年 妙 <small>口</small> <small>口</small> 十 <small>口</small>	
863	山裾	一石五輪塔	地	24.0	24.0 地厚さ 17.0				1528	<small>口</small> 大永八年 月 <small>口</small> 宗祐神定門 八月 <small>口</small> 二日	
865	山裾	一石五輪塔	地	15.5	15.5 地厚さ 13.0				1541	天文十年辛丑 正珠書女靈位 十二月十八日	
875	山裾	一石五輪塔	地	22.8	22.8 地厚さ 16.8					貞壽	梵字を墨の花輪でかこみ、 蓮座の彫刻をほどこす。
876	山裾	一石五輪塔	地	21.5	21.5 地厚さ 17.0					天文 <small>口</small> 妙香天姫 十月十日	
877	山裾	一石五輪塔	地	25.2	25.2 地厚さ 16.7				1536	天文五丙申年 妙香神定尼 四月十五日	
878	山裾	一石五輪塔	地	25.2	25.2 地厚さ 17.0				1520	永正十七天徳姫 盛妙書女正年七歳 五月十六日	
879	山裾	一石五輪塔	地	22.2	22.2 地厚さ 15.7				1545	天文十四年 妙香神尼 二月廿二日	
880	山裾	一石五輪塔	地	22.2	22.2 地厚さ 17.1				1519	永正十六年 宗林神定門 十月十日	
881	山裾	一石五輪塔	火水地	45.4	23.0 地厚さ 17.0		11.6		1521	大永元年 宗林神門 二月	
911	山裾	石仏		幅 30.0 厚さ 11.0						宗主 法門	上彫欠
921	山裾	板碑		幅 19.5 厚さ 7.0						定尼 日	上彫欠
922	山裾	石仏		幅 26.0 厚さ 12.0						門盛妙 五月一日	上彫欠
925	山裾	板碑		幅 21.6 厚さ 8.5						年忌	上彫欠

番号	場所	種類	形状	総高	地輪高	水輪高	火輪高	空輪高	西暦	終文	備考
926	山麓	石仏		30.0 幅 厚さ 5.0						道慶碑／	下部欠
937	山麓	一石五輪塔	地	18.0	18.0 12.5 幅 厚さ 12.5				1560	永禄三天 壽得童女 十一月十七日	Ko 252
947	山麓	数碑		厚さ 4.5						道秀□／	
962	山麓	数碑		厚さ 10.0						／御門 ／二日 ／六年 ／御尼 □日	
965	山麓	数碑		厚さ 6.5						妙慶大姉	
984	山麓	一石五輪塔	地	20.0	20.0 18.5 幅				1566	永禄九丙寅	後半分欠
1001	山麓	石仏								／御／ ／九月一日／	上下欠
1027	山麓	一石五輪塔	地	14.0	14.0 10.5 幅				1563	□□童子□ ／禄六年二月八日	裏側欠
1031	山麓	石仏								二十九番松尾／	西四三十三所霊場の二十九番目松尾寺の石仏。
1033	山麓墓地	一石五輪塔	地	23.5	23.5 17.0 幅 厚					永禄二己未年 道慶御門 十一月廿日	
1036	山麓墓地	一石五輪塔	水地		23.0 17.0 幅 厚	17.5			1527	道忍禅定門 門 大永七年十一月十九日	
1037	山麓墓地	一石五輪塔	地	19.0	19.0 13.0 幅 厚				1549	天文十八年 妙惠禅尼	
1047	山麓	一石五輪塔	地	22.0	22.0 15.0 幅 厚 14.5				1546	天文十五年 妙智大姉 八月一日	
1051	山麓	一石五輪塔	地	25.0	25.0 16.0 幅 厚 16.5				1520	永正十七天 妙泉御門 五月廿四日	
1065	山麓	一石五輪塔	地	19.5	19.5 18.5 幅 厚 18.0					妙盛禅尼 □□□□	
1101	山麓	一石五輪塔	地	17.0	17.0 14.5 幅 厚さ 13.5				1523	大永二年 ／女	
1102	山麓	一石五輪塔	地	18.0	18.0					□□宗信禅定門	地輪一部のみ
1103	山麓	一石五輪塔	地	24.0	24.0 16.0 幅					圓昌御門 西月廿九／	後半分欠

番号	場所	種類	形状	総高	地輪高	水輪高	火輪高	空輪高	西暦	銘文	備考
1104	山裾	一石五輪塔	地	24.0	幅 24.0 17.0					酒香	後半分欠
1106	山裾	一石五輪塔	地	20.5	幅 20.5 16.5					高志源 九月	半欠
1111	山裾	板碑		21.0 24.0 幅厚さ 8.0						善長 長圓 具心 心腎 石観 観清	割付線あり
1115	山裾	笠塔婆	塔身							南無妙法	
1118	山裾	石仏							1530	全禪定門 天文二癸巳十一月五日	
1120	山裾	石仏								眞當六親 祐禪定門	1126と結合
1122	山裾	石仏								遺香	
1144	山裾	一石五輪塔	地	23.0	幅 23.0 17.0					妙蓮大師	裏側が欠けている
1148	山裾	一石五輪塔	地	17.5	幅 17.5 15.0					年未 朝禪定尼 一月廿六日	裏側と上部が欠けている
1161	山裾	板碑		23.0 19.0 幅厚さ 6.0					1522	第三年 阿彌陀佛 大永二年	
1179	石台座	一石五輪塔	地	25.0	幅 25.0 16.5 幅厚さ 16.0					三年 禪定門 十一月	
1181	石台座	一石五輪塔	地	23.5	幅 23.5 17.8 幅厚さ 16.5				1535	天文四年乙未 妙音禪尼逆修 七月	
1183	石台座	一石五輪塔	地	26.4	幅 26.4 18.8				1564	天文廿三年 妙實禪定門	
1188	石台座	一石五輪塔	地	20.0	幅 20.0 17.0 幅厚さ 16.0				1594	天文三年甲午 盛比丘尼 十二月	
1218	石台座	一石五輪塔	地	16.7	幅 16.7 15.0 幅厚さ 14.9					妙慶禪尼 天文三年甲午二月九	
1228	石台座	一石五輪塔	地	22.0	幅 22.0 17.8 幅厚さ 16.8				1530	天文二年 禪門 月	
1229	石台座	一石五輪塔	地	22.5	幅 22.5 17.0 幅厚さ 16.9				1557	天國庵主 逆修 弘治三丁巳八月九日	割付線三本
1230	石台座	一石五輪塔	地	21.3	幅 21.3 16.2 幅厚さ 14.7				1544	天文十三年 王童童子 八月十二日	



番号	場所	種類	形状	総高	地輪高	水輪高	火輪高	空輪高	西暦	銘文	備考
1247	右台座	一石五輪塔	地	20.3	20.3 16.3 溝厚さ 15.5				1544	天文十三年 □□神定門 十二月廿七日	
1248	右台座	一石五輪塔	火水地	46.0	22.0 17.0 溝厚さ 16.5	18.5	11.0		1538	明哲神定門 大永八年庚子七月廿三日	
1249	右台座	一石五輪塔	地	26.0	26.0 18.0 溝厚さ 19.0					十□□年 遷葬上座 日	
1250	右台座	一石五輪塔	地	22.0	22.0 11.5 溝厚さ 17.2					四/ 西法法師 正月三日	
1254	右台座	一石五輪塔	火水地	43.0	17.7 17.5 溝厚さ				1615	盛春法師 永正十二乙亥三月四日	裏面を削る、三面は梵字あり
1261	右台座	一石五輪塔	水地	23.3	17.2 12.5 溝厚さ 12.9	13.4			1530	享禄三年 清久童女 十月廿六日	
1264	右台座	一石五輪塔	火水地			16.4	11.5		1640	天文九/ 道朝神 十一月十五日	
1265	右台座	一石五輪塔	火水地	41.0	16.3 17.0 溝厚さ 16.3	19.1	12.0		1512	為盛清法師 永正九壬申正月七日	
1270	右台座	一石五輪塔	火水地	44.0	18.5 17.0 溝厚さ 16.5	17.7	12.5		1508	為西道神門 永正五天十月廿四日	
1273	右台座	一石五輪塔	地	27.0	27.0 20.4 溝厚さ 20.6				1548	天文十七年戊申 真得神定尼 八月廿六日	
1276	右台座	一石五輪塔	地	21.8	21.8 17.3 溝厚さ 15.3					妙跡神尼	
1280	右台座	一石五輪塔	地	24.5	24.5 16.5 溝厚さ 16.5					大永/ 道教神 七月十七日	後倒かけている 前面うすくかけている
1296	右台座	一石五輪塔	地	22.0	22.0 14.5 溝厚さ 15.0					□□三年 □□神定門 十月廿五日	
1299	右台座	一石五輪塔	地	23.0	23.0 18.2 溝厚さ 16.5					芳室妙尊大師 七月五日	
1302	右台座	一石五輪塔	地	21.0	21.0 17.5 溝厚さ 17.0				1533	大永三天癸未 善西神門 三月六日	
1305	右台座	一石五輪塔	地	24.0	24.0 18.5 溝厚さ 18.0				1545	天文十四乙巳年 道久神門	
1314	右台座	一石五輪塔	地	24.0	24.0 17.5 厚さ				1545	永正十七戊申年 妙華神尼	
1316	右台座	一石五輪塔	地	23.0	23.0 17.0 溝厚さ 17.5				1529	享禄二年 □□神門 四月廿六日	
1320	右台座	一石五輪塔	火水地	45.0	23.0 18.0 溝厚さ 17.5	17.5	11.5			妙慶神尼 □□□□	

番号	場所	種類	形状	総高	地輪高	水輪高	火輪高	空輪高	西暦	紀文	備考
1331	右台座	一石五輪塔	火水地	44.5	地輪高 18.0 地厚さ 18.5	19.0	13.0		1514	法祐神尼 永正十一年五月六日	
1332	右台座	一石五輪塔	火水地	40.0	地輪高 19.5 地厚さ 16.5	16.5	10.5		1540	天文九年 妙慶神尼 五月八日	
1333	右台座	一石五輪塔	火水地	44.5	地輪高 18.5 地厚さ 17.5		14.0		1505	為善心神門 永正二天四月六日	
1334	右台座	一石五輪塔	地	26.0	地輪高 20.0 地厚さ 19.5				1536	天文五年丙申 □□神定門 □月廿八日	
1336	右台座	一石五輪塔	地	22.0	地輪高 22.0 地厚さ 17.0				1516	永正十三年 妙清神尼 二月七日	
1337	右台座	一石五輪塔	地	21.5	地輪高 21.5 地厚さ 16.0				1528	大永八□□月七日	
1348	右台座	一石五輪塔	地	22.2	地輪高 22.2 地厚さ 19.2				1522	大永二年 妙教神尼 七月十五日	
1353	右台座	一石五輪塔	地	22.0	地輪高 23.0 地厚さ 15.0				1546	天文十四年之巳 朝奏遺女 二月廿七日	
1357	右台座	一石五輪塔	地	21.0	地輪高 21.0 地厚さ 14.3					享/ 正圖比丘尼 九月五日	
1358	右台座	一石五輪塔	地	21.0	地輪高 21.0 地厚さ 17.0				1530	享祿三年庚寅 妙壽神尼 三月□日	
1359	右台座	一石五輪塔	火水地	45.5	地輪高 21.5 地厚さ 17.5	19.0	11.0			盛慶	
1360	右台座	一石五輪塔	地	21.0	地輪高 21.0 地厚さ 18.5				1528	享祿元年 雲青神尼遷座 九月十二日	
1366	右台座	一石五輪塔	地	18.0	地輪高 18.0 地厚さ 17.0				1490	為真定神門 延徳二庚戌三月三日	
1368	右台座	一石五輪塔	地	21.0	地輪高 21.0 地厚さ 16.5				1523	妙慶大師 大永三天七月十三日	
1369	山割	一石五輪塔	地	21.0	地輪高 21.0 地厚さ 15.0				1528	大永八年 明春大師 □□三月□日	
1375	右台座	一石五輪塔	地	16.0	地輪高 15.0 地厚さ 15.5					賢□大師 □□二月十日	
1377	右台座	一石五輪塔	火水地	50.8	地輪高 21.3 地厚さ 20.0	21.5	15.0			為大徳興上座 永正十癸酉 遷座 二月廿四日 永正廿巳八月十五日	
1390	右台座	一石五輪塔	地	23.0	地輪高 23.0 地厚さ 19.0				1523	大永三年 盛慶神定門 十一月廿六日	

番号	場所	種類	形状	総高	地輪高	水輪高	火輪高	空輪高	西暦	銘文	備考
1391	石台座	一石五輪塔	地	21.0	21.0 16.0 幅厚さ 15.0				1496	五天丙辰 玉置口金屋十 十二月七日	
1399	石台座	一石五輪塔	火水地	39.0	19.0 14.0 幅厚さ 14.0	14.0	10.0			遊戒法師 天文九年庚子五月八日	
1403	石台座	一石五輪塔	火水地	41.0	18.0 17.5 幅厚さ 16.5	18.0	12.5		1508	為妙全禅/ 永正五戊辰十月八日	
1404	石台座	一石五輪塔	地	18.0	18.0 14.0 幅厚さ 13.5					□實	
1405	石台座	一石五輪塔	地	23.0	23.0 17.5 幅厚さ 17.0				1524	大永四年甲申 全水禅門 十二月廿五日	
1412	石台座	一石五輪塔	地	19.0	19.0 15.5 幅厚さ 16.0				1535	天文四年乙未 妙蓮童女 六月廿八日	
1413	石台座	一石五輪塔	地	23.5	23.5 18.0 幅厚さ 17.5				1506	永正二天 道口禅門 二月十五日	
1416	石台座	一石五輪塔	火水地	31.0	21.5 20.5 幅厚さ 20.5	21.5	14.5		1524	明藏禅旭居士 大永四天天口月廿六日	
1417	石台座	一石五輪塔	火水地	46.0	24.5 16.5 幅厚さ 17.0	15.5	11.0			智慶大徳運世	
1423	石台座	一石五輪塔	地	18.5	18.5 15.0 幅厚さ 15.5				1515	善久童子 永正十二乙亥七月十二日	
1424	石台座	一石五輪塔	地	24.5	24.5 17.0 幅厚さ 17.5				1550	天文十九年 權部宗安禪定門 二月廿七日	
1425	石台座	一石五輪塔	火水地	34.0	17.5	14.5	18.5		1528	善久童子 大永八天正月一日	
1430	石台座	一石五輪塔	地	24.5	24.5 17.0 幅厚さ 17.0				1536	天文五年丙申 盛金童子 二月八日	
1433	石台座	一石五輪塔	火水地	36.0	18.2 15.5 幅厚さ 15.0	15.1	9.3		1545	天文十四年乙巳 妙實童子 五月廿一日	
1435	石台座	一石五輪塔	地	20.0	20.0 16.0 幅厚さ 14.5					天文十 道口法口 五月廿九日	
1436	石台座	一石五輪塔	火水地	42.0	19.8 17.0 幅厚さ 16.8	16.8	11.5		1563	永種六 立蓮盛/ 四月	新刊繪三本
1440	石台座	一石五輪塔	地	16.0	16.0 12.0 幅厚さ 12.5				1536	天文五丙申 妙蓮童/ 九月十日	
1444	石台座	一石五輪塔	地	22.8	22.8 16.5 幅厚さ 16.0				1539	天文八年乙亥 月作善心禪定門 六月十九日	KOS1

番号	場所	種類	形状	総高	地輪高	水輪高	火輪高	空輪高	西暦	銘文	備考
1446	石台座	一石五輪塔	地	17.0	17.0 11.8 幅厚さ 11.8					梵蓮法印	
1452	石台座	一石五輪塔	地	24.5	24.5 19.2 幅厚さ 20.0				1500	善秀大姉 天文九年庚子十月十四日	
1458	石台座	一石五輪塔	地	17.9	17.9 6.5 幅厚さ 6.0				1514	ノ林神門 永正十一年戊戌十月八日	
1470	石台座	一石五輪塔	地	22.7	22.7 15.8 幅厚さ 16.5				1508	享禄元年戊子 全久大姉 九月十一日	
1472	石台座	一石五輪塔	地	6.4	6.4 13.5 幅厚さ 13.9				1503	花原運春重女 天文二癸巳年三月十日	
1483	石台座	一石五輪塔	地	21.5	21.5 21.5 幅厚さ 21.0				1509	通勝神定門 享禄二天乙丑三月廿七日	
1483	石台座	一石五輪塔	地	23.0	23.0 16.5 幅厚さ 17.0				1524	株林東勝神□ 大永四年甲申御月五日	
1498	石台座	一石五輪塔	地	22.0	22.0 21.0 幅厚さ 20.5					□□□神定 □□ □月十六日	
1505	石台座	一石五輪塔	地	23.5	23.5 17.0 幅厚さ 16.5				1516	永正十六天 妙天神定尼 十二月廿六日	
1507	石台座	一石五輪塔	火水地	37.5	29.5 14.0 幅厚さ 14.0		7.5		1544	天文十三年 善榮神定門 九月五日	
1509	石台座	一石五輪塔	火水地	45.0	22.5 17.0 幅厚さ 17.0	18.5	9.0		1505	□□□□ 永正二□四月□□	
1519	石台座	一石五輪塔	水地	35.0	20.5 16.5 幅厚さ 17.0	17.5			1523	□□法師 大永三天四□十五日	
1528	石台座	一石五輪塔	火水地	45.0	22.0 17.0 幅厚さ 17.0	19.0	11.0		1524	大永四年 徳三神門 十一月七日	
1530	石台座	一石五輪塔	火水地	43.5	18.0 19.0 幅厚さ 18.5	19.0	14.0		1508	為善仁童子 永正五戌□十二月廿八日	
1532	石台座	一石五輪塔	地	18.0	18.0 17.0 幅厚さ 16.5				1543	□善大姉 逆應 永正十二天七月十五日	
1534	石台座	一石五輪塔	地	23.0	23.0 17.0 幅厚さ 16.5					□□ 天□□□ 十月□□□	
1535	石台座	一石五輪塔	地	20.5	20.5 14.0 幅厚さ 14.0					盛珍法師逆ノ	
1538	石台座	一石五輪塔	地	21.0	21.0 17.5 幅厚さ 18.0					祐略神尼 十四日	

番号	場所	種類	形状	総高	地輪高	水輪高	火輪高	空輪高	西暦	銘文	備考
1545		一石五輪塔	地	22.5	22.5 幅厚さ 17.5 17.0					妙清淨尼	
1548	石台座	一石五輪塔	地	22.0	22.0 幅厚さ 18.0 18.0					□□□□ □□海門 六月□□	削られて読めず
1549	石台座	一石五輪塔	地	20.5	20.5 幅厚さ 15.0 14.5					善口法師	
1553	石台座	一石五輪塔	地	24.5	24.5 幅厚さ 19.0 17.0				1548	永正十七天 妙田童女 八月廿七日	
1558	石台座	一石五輪塔	地	30.0	30.0 幅厚さ 13.0 13.0				1538	遊珠禪定門 天文七年正月十九日	
1561	石台座	一石五輪塔	地	28.5	28.5 幅厚さ 19.5 20.5				1494	性妙大師 明應三年正月十五日	
1564	石台座	一石五輪塔	火水地	48.0	48.0 幅厚さ 17.5 17.5	16.5	13.0		1554	天文廿三年 □西上人 □月三日	火、水輪裏側かけている
1570	石台座	板碑		幅 21.0						西 無阿弥陀仏道 大水	
1572	石台座	石仏							1543	文十二年 七月廿七日	上彫欠。左手に蓮の花も持つ。
1583	石台座	石仏	地蔵							妙賢辨	下彫欠
1593	石台座	石仏	地蔵							永心禪定門 三月□日	下彫欠
1601	石台座	石仏							1543	文十二年八月廿九日	上下欠
602	石台座	石仏							1548	文十七正月廿三日	上彫欠
1604	石台座	石仏	地蔵	幅厚 21.0 8.0					1563	心善童子 永禄六年七月	
1606	石台座	石仏							1567	宗徳上座永禄十年六月	上下欠
1613	石台座	石仏							1540	清林 天文九	下彫欠
1619	石台座	石仏								□□門□□ 妙慶童女善了童子	上彫欠
1642	石台座		供花器							山慶啓禪定尼	

## 6. 環境整備

戦国大名朝倉氏が領国支配の拠点とした一乗谷には、谷地形を巧みに利用し、山城とその麓の当主の館を核とした計画的に造られた都市の遺構が極めて良好に遺されており、その中心部「城戸ノ内」地区を主とした278ヘクタールという広大な地域が特別史跡として指定されている。この遺跡を保存すると共に「史跡公園」として整備し、歴史と生きた対話のできる場を提供することを目的として環境整備事業を実施している。

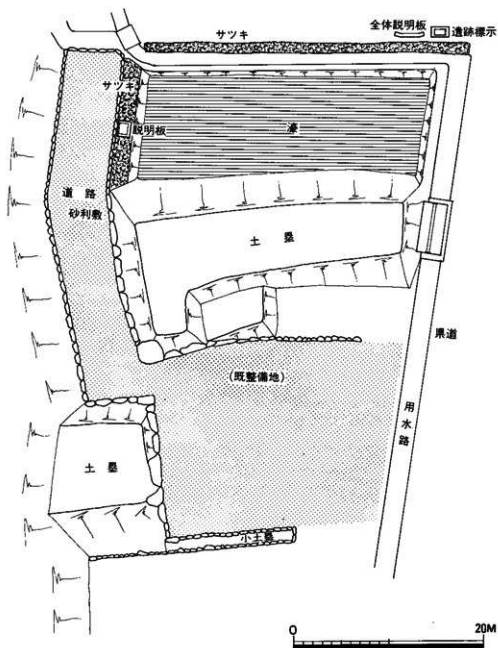
事業は1967年以来継続しており、これまでに約10ヘクタールの調査整備を実施し、山城を除き、平地部の概要を知ることが可能となってきた。今年度は、城下町一乗谷の中心である城戸ノ内を区画する、いわば一乗谷朝倉氏遺跡の顔ともいえる重要な場所である下城戸口の整備事業を実施した。この下城戸跡は、1979年の第35次調査、1986年の第56次調査と2回の調査によりその概略を解明し、順次整備工事も実施してきたが、出入り口部については未公有地であったため調査整備事業が残されてきた。近年土地所有者の理解を得て土地公有化が完了したのを受けて1994年に発掘調査を実施し、今年度その整備工事を実施し、城戸口全体の整備が完了した。

以下、その工事の概要を報告する。

### 下城戸口整備工事

この工事は、1994年に第85次調査区として発掘調査を実施した、福井市安波賀町字土居ノ本地係約400㎡を対象とするものである。前述したように1979年の第35次調査（1,630㎡）、1986年の第56次調査（1,200㎡）と2回の調査とそれを受けた整備事業に引き続いて実施したもので、今回の工事により城戸口全体の整備が完了した。

下城戸は、東西の山が迫り、その谷幅が約80mと最も狭まった谷の入口に設けられた重要な防衛施設で、この1.7km上流に設けられた上城戸と共に城下町一乗谷の中心となる城戸ノ内を区画している。これまでの調査により、下城戸は、基本的には西の山裾の道路部を除いて、幅約10m・深さ約3mの濠と幅約15m・高さ4.5mの土塁で谷の入口を遮断し、この内側、約3.6m南に道路を遮るよう山裾から突出させた同様の規模の土塁を設ける構成をとることが判明している。なお、一乗谷川は当時はもっと東に寄っていたことも明らかになっており、下城戸土塁は現状より長くなり、この川と城戸外濠は直接つながっていたと考えられる。また、城戸の内側には西の山裾から突出する土塁の南辺に沿って土塀の基礎部と推定される幅1.5mの小土塁が設けられており、この間が広場的な場となっていたと考えられる。そして、この南には小規模な屋敷が連続して検出されており、中には越



第8図 下城戸全体図

前焼大甍を15・30個据え付けた建物もあり、商人・職人などの町屋が接していたと考えられている。

この城戸の特徴は、なんといっても巨大な石を用いた石垣が存在することである。重さが10tを超すような巨大な石を2～3段に4m近く積み上げており、その最大のものは40tを超えている。戦国時代において、このような巨大な石を用いた石垣は他に例を見ないものであって、朝倉氏が優れた土木技術を有していたことが知られる。

今回の整備工事の主眼は、見学者が往時の人々同様に城戸口を通して城下町の中心部へ入ることが可能なようにすることである。そのため、1987年度に実施した土塁及び石垣の整備工事に引き続いて、城戸口石垣の修復を中心とした整備を計画した。その内容は、主として調査で判明した他に例を見ない巨大な石を用いた石垣を、当時のまま残されていた基底部の石を基準として復元修復することである。そのため、大型のトラッククレーンを用いて、倒れていた石を起し、周囲に散在していた石等を用いて石垣の修復を実施した。前回の工事分に併せ、工事に際し計測した主な石の重量は別表の通りである。

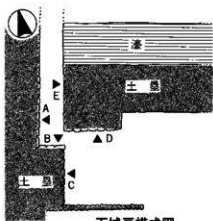
そして、山裾に設けられた道路部は、砂利を敷き詰めてそのまま見学路として用いることとした。なお、西の山裾部には土留めを兼ねて新たに石垣を設けた。また、外濠の間には転落防止を兼ねてツツジを密植すると共に、笏谷石製基台にアルミ板に城戸口全体の解説を焼き付けた説明板を設置した。

工事の完成によって、見学者は、他に類例を見ない高さ3mを超す巨大な石を用いた石垣を見上げながら、この城戸口を通行することが可能となった。その時、石垣の迫力に圧倒され、朝倉氏の土木技術の優秀さをまのあたりにすることが出来るものと考えている。

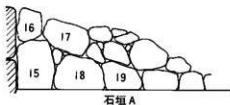
## 遺跡全体説明板設置工

下城戸は、前述した通り、遺跡の顔ともいえる重要なものであり、また指定地の境界に位置している。そこで、遺跡全体の説明板を設け、遺跡見学者の便益に資することとした。設置場所は、見学者の基本導入路である県道からも目に入る必要があることから、下城戸外濠に接して大きな史跡標柱が設けられている脇とした。凝灰岩を用いた幅2.6m、高さ2.1mと大型の基台に、0.8m×1.2mの説明板を2枚はめこむ遺跡における大型立型説明板形式を採用した。表示方式は、耐久性と写真やイラスト等の精度の高いグラフィックにも対応可能な方式として新たに開発されたステンレスホーロー板に無機質顔料を印刷し、高温焼成する方法を採用し、解説文と4色に色分けした案内図をはめこんだ。(吉岡)

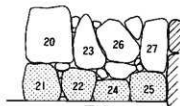




下城戸横式図



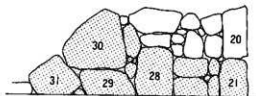
石垣 A



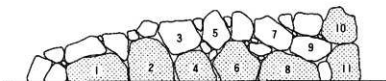
石垣 B



石垣 D



石垣 C



石垣 E

※アミ石は原位置を保つ

第9図 石垣 石形状

下城戸石垣使用石形状一覧表

No	縦割×横割×奥行きの単位:m	重量単位:t	備 考	No	縦割×横割×奥行きの単位:m	重量単位:t	備 考
1	2.0 3.2 2.0	17	推定、当時のまま	17	1.4 2.2 1.2	5	
2	2.5 2.4 1.5	12	据え直し	18	2.0 2.5 1.5	6.9	
3	2.3 2.4 1.3	7.7		19	1.6 2.0 1.5	5.5	
4	1.9 1.7 1.0	4.5	据え直し	20	3.4 2.4 1.0	14	
5	1.8 2.1 1.2	5		21	2.1 2.0 1.5	10	据え直し
6	2.6 2.3 1.5	14	据え直し	22	1.7 1.6 1.2	6	据え直し
7	2.2 1.3 1.5	5		23	2.6 1.4 1.2	11	
8	3.3 2.1 2.0	15		24	1.4 2.0 1.5	9.5	推定、当時のまま
9	2.1 1.2 1.5	5.5		25	1.8 2.0 1.5	12	推定、当時のまま
10	2.1 2.0 1.8	11.5	据え直し	26	2.4 1.6 1.2	7	
11	2.4 3.6 2.1	45	据え直し	27	2.7 1.5 1.0	6.5	
12	1.9 1.9 1.1	8		28	2.0 3.2 1.0	12	据え直し
13	2.7 2.4 1.5	14	推定、当時のまま	29	1.6 2.8 1.2	10	推定、当時のまま
14	2.0 3.7 1.5	20	推定、当時のまま	30	3.1 3.2 1.0	20	推定、当時のまま
15	2.7 2.0 1.2	8.3		31	2.1 2.1 1.0	7	推定、当時のまま
16	1.8 1.4 1.2	5.5					



調査地区西半景 (南東から)



調査地区東半景 (南東から)



調査地区中央部（東から）



調査地区中央部（西から）



調査地区北半 (南から)



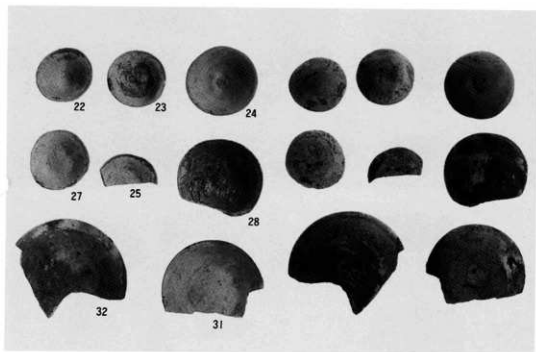
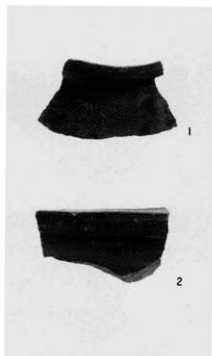
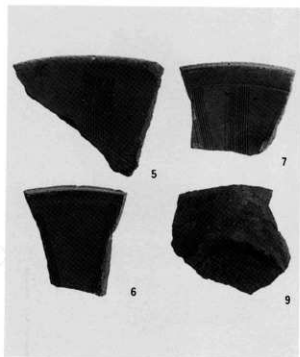
石積遺構 S F 4587 石組溝 S D 4572



石組溝 S D 4579 (西から)



石垣 S V 4618 (西から)



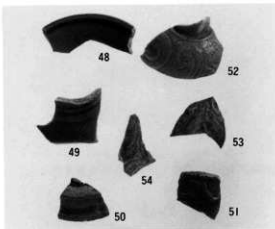
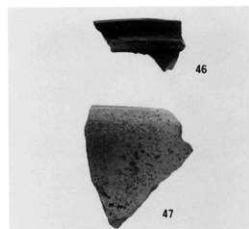
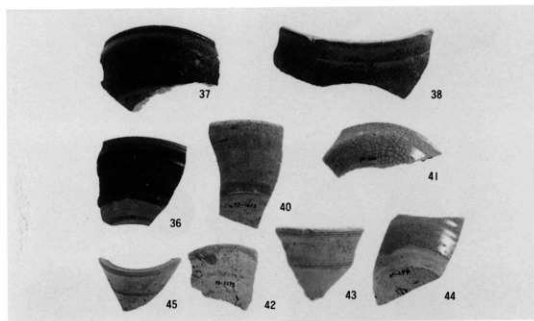
越前焼表 1 - 2 楯鉢 5 - 7, 9 土師質皿 22 - 25, 27, 28 31 32



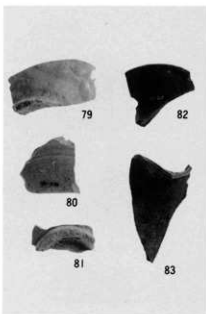
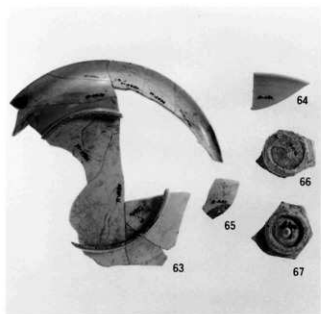
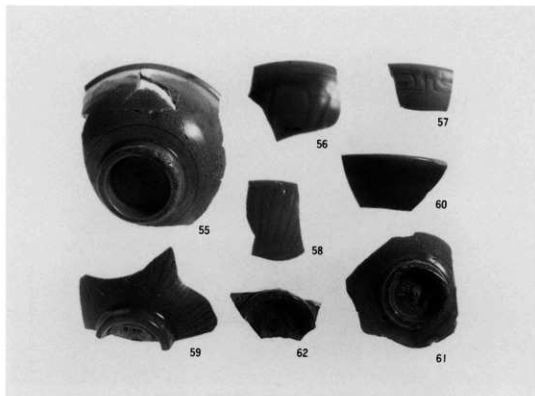
35



39

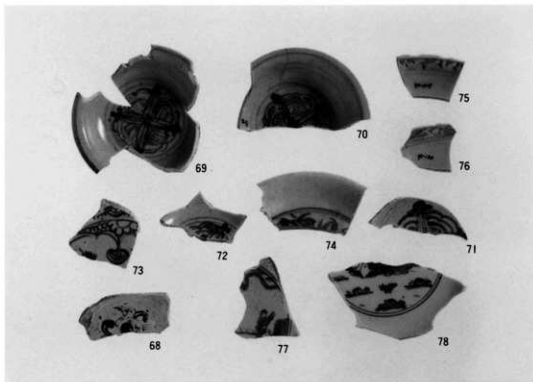


鉄釉碗35-37 水指38 壺39 灰釉碗40 皿41, 42 香炉43 小壺44 無軸香炉45 瓦質羽釜46  
鉢47 青磁花生48-51 青白磁梅瓶52-54



青磁碗55～62 白磁皿63～69 朝鮮製陶磁器 白磁碗79～81 瓶82, 83





染付碗68 皿69-78



調査地区東半（西から）



調査地区西半（東から）



調査地区東北部（西から）



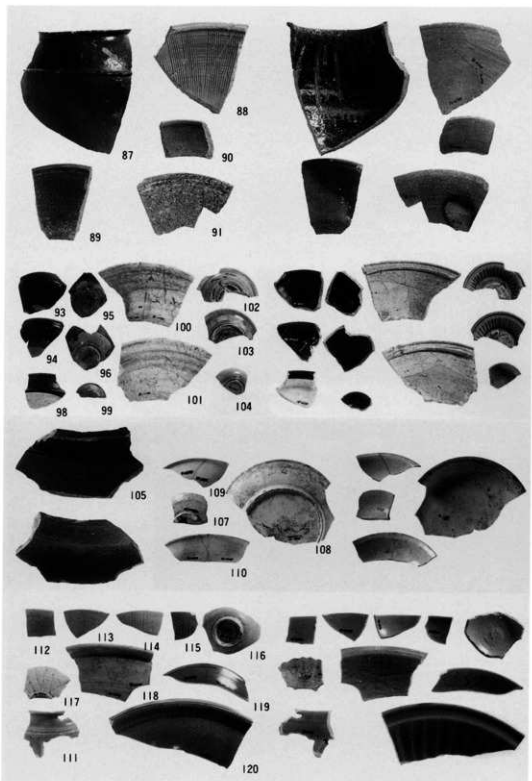
調査地区東南部（西から）



S E 4529 (西から)

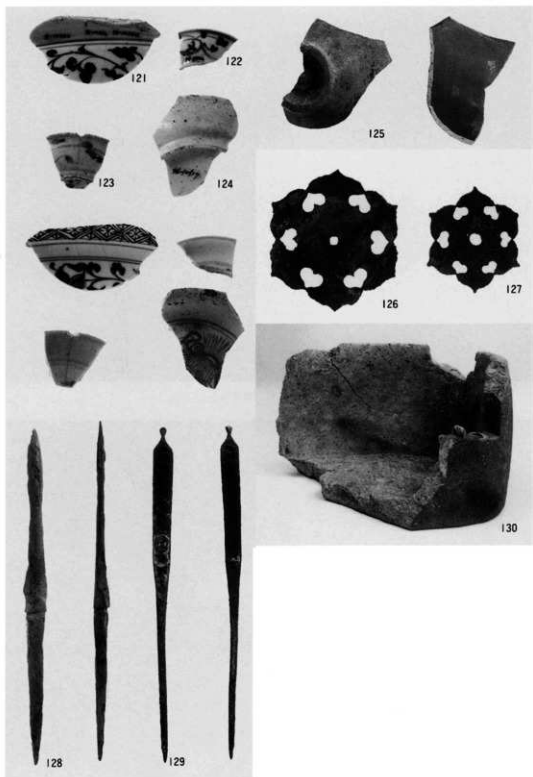


礎石建物 S B 4525 大甕埋設遺構 S X 4530 (北から)



越前焼壺87 襦鉢88~89 鉢90~91 鉄軸碗93~96 香炉98 皿99 灰軸鉢100~101

皿102~104 瓦質風炉105 白磁皿107~110 青磁器台111 碗112~116 皿117 盤118~120



染付盤121 皿122~124 朝鮮製蕎麦茶碗125 金属製釘隠126~127 槍先128 筭129  
 笏谷石製バンドコ130



全 景 (北から)



西石垣 (東から)



東土壘石垣 (南西から)



東土壘石垣 (南西から)





北面石垣・西石垣（北東から）



西石垣（北東から）



東土壘石垣・北面石垣



一乗谷朝倉氏遺跡説明板

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせき
書名	特別史跡—乗谷朝倉氏遺跡1996
副書名	平成8年度発掘調査環境整備事業概要⑦
シリーズ番号	27
編著者名	岩田隆 吉岡泰英 佐藤圭 水村伸行 宮永一美
編集機関	福井県立—乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-21 福井県安波賀町4-10 ☎0776-41-2301
発行年月日	平成9年3月31日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
第96次調査	福井市城戸ノ内町 字上川原	18210	史-31	35°56' 50"	135°18' 00"	960423 ~0523	630㎡	家屋改築 に伴う現 状変更
第97・98 次調査	福井市東新町字安 如寺	18210	史-31	35°59' 25"	135°17' 40"	960401 ~1225	2,400㎡	環境整備 に伴う事 前調査

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第96次 調査	武家屋 敷	15・16世紀	土塀基礎1・礎石建 物5・埋甕遺構1・ 溝6・井戸2・つく ばい1	越前焼・土師質皿・ 瀬戸美濃焼・青磁・ 白磁・染付・元染付・ 華南彩釉陶器・槍・ 釘隠し	2区画の武家屋敷を 確認した。出土遺物 から伝承どおり重臣 の屋敷と推定。
第97・98 次調査	寺院	15・16世紀	礎石建物5・土塁1・ 石垣1・溝9・石組 遺構1・炉	越前焼・土師質皿・ 瀬戸美濃焼・青磁・ 白磁・染付・朝鮮製 陶磁器・石仏石塔・ 狛犬・銅銭	後の15代將軍義昭が 逗留したと伝えられ る寺院跡

特別史跡  
一 乘谷朝倉氏遺跡

平成8年度発掘調査環境整備事業概要⑦

発行年月日 平成9年3月31日

編集・発行 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館◎

印刷 河和田屋印刷株式会社